

Title	松花堂の意匠：現状分析と創建当時の姿に関する考察
Author(s)	佐藤, 悦子; 野口, 企由
Citation	デザイン理論. 2023, 82, p. 7-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92366
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

松花堂の意匠

現状分析と創建当時の姿に関する考察

佐藤悦子
野口企由

キーワード

松花堂, 昭乗, 閑雲軒, 天井画, 竈
Shokado, Shojo, Kanunken, Ceiling Painting, Kamado Kitchen Stove

はじめに

1. 先行研究・資料の整理と比較
2. 松花堂の立地と室内
 - 2-1. 松花堂の建物の位置, 縁側, および露地, 近隣建物との関係
 - 2-2. 松花堂と遠景との関係
 - 2-3. 松花堂の室内 (入口, 土間, 板の間, 二畳の間, 躰口)
 - 2-4. 松花堂の竈
 - 2-5. 松花堂の天井画
3. 総括と結論

はじめに

江戸時代を代表する芸術家である松花堂昭乗（1584-1639, 生没年は『松花堂行状』による, 以後, 昭乗）は幼少の頃に石清水八幡宮の塔頭の一つである瀧本坊に入った後, 晩年に瀧本坊の南の泉坊¹に隠遁し, その直後の1637年, 「松花堂」を造った。しかし, 明治時代初期の廃仏毀釈によって石清水八幡宮の全ての宿坊は撤去された。その後, 泉坊と松花堂の部材は1874年に大谷直（明治4年に中山治麿から大谷直へ改名）へ売却されたが, 1880年には八幡志水の南端部の東方にふたたび移された。さらに1891年, 井上伊三郎がこれを譲り受け, 洪水等の憂いを避けるため高台の現在地に移すと共に, 泉坊の庭園も同地に移し, そこに自らの邸宅を築いた²。この現在地はその後, 持ち主を変えながら1977年に八幡市が公有化し, 松花堂は八幡市立松花堂庭園・美術館（以後松花堂美術館）敷地内に現存している。八幡に現存する松花堂は方丈として, また茶室として二つの機能が備わっている。狭い空間に幾つもの動線が意図され, それらが土間と竈, 二畳の間, 板の間, 縁側, 躰口等の導入によって調整されている。『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告 第十三冊』の資料の中に室内

本稿は, 第248回例会（2022年5月7日, 京都精華大学）での発表にもとづく。

の様々な写真が記録されている³。しかし、創建当時の松花堂の姿を辿ることができる明確な資料は現在まで発見されていない。

本論では、先行研究の比較とフィールドワークを基に、新しく発見した情報と既存情報を上手く組み合わせ、歴史的考察と現状のデザイン分析から、可能性のある創建当時の松花堂の姿を描き出すことを目的とする。今回取り上げる範囲は、フィールドワークを行うことができた建物の配置、露地、入口、土間、板の間、二畳の間、縁側、躰口、竈、天井画とする。

1. 先行研究・資料の整理と比較

まず、松花堂に関する記述や図録がある著名な文献を調査し、重要と思われるもの15点を発行年代順にその特徴と共に以下の表にまとめた。今回取り上げた部分についても多く取り上げられている。1. 2. 7は松花堂の創建当時の姿を見て書いた可能性が高い記録であり、3. 4. 5. 6. 8-15ではそれらを基にした識者の見解が示されている。

表1 松花堂に関する先行研究・資料の表

1) 1639, 佐川田昌俊, 『松花堂行状』: 昭乗の人柄・交友関係・密教への思い等に関する伝記的記述がある。
2) 1779, 秋里離嶋, 『都名所圖會』: 「荒廢におよんで泉坊あり」と、泉坊と松花堂が荒廢していたことの記述がある。
3) 江戸時代後期, 『八幡泉之坊松花堂真図』: 庭園や露地を含め、泉坊と松花堂の平面図の記載がある。
4) 1799, 秋里離嶋, 『都林泉名勝圖會』: 泉坊と松花堂の絵図が記載され、「三竈物置棚あり」との記述がある。
5) 江戸時代後期, 『名物数寄屋図』: 『都林泉名勝圖會』内の「八幡泉坊昭乗翁故居」と松花堂の平面図等の記載がある。
6) 年代不詳, 『中沼家譜』: 昭乗と兄の中沼左京の行状と家系図を記載し、女子は「星野某ノ妻」との記述がある。
7) 1848, 藤原尚次, 『石清水八幡宮史料叢書一 男山考古録 全』: 宮全体と松花堂の歴史的経緯の詳細な記述がある。
8) 1932, 京都府, 『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十三冊』: 松花堂の室内外を記録した様々な写真の記載がある。
9) 1938, 佐藤虎雄, 『松花堂昭乗』: 昭乗の人となりと松花堂の資料。『八瀧珍藏録』の引用あり(原本確認済)。
10) 1939, 井川定慶, 『西村閑夢追悼集』: 西村芳次郎亡き後、徳富蘇峰、佐藤虎雄、重森三玲等の追悼文の記載がある。
11) 1964, 堀口捨巳, 『茶室おこし絵図集 第四集』: 松花堂の茶室のおこし絵図と、建築の特徴に関する記載がある。
12) 1971, 中村昌生, 『茶室の研究』: 「遠州が瀧本坊に造った閑雲軒の様に廊下を露地に使った例」との記述がある。
13) 2002, 林野全孝, 『大阪市文化財総合調査報告書 35』『大阪市桜宮松花堂調査報告』: 八幡松花堂との比較を記す。
14) 2011, 『石清水八幡宮境内調査報告書』: 遺跡の遺存状況を確認するための発掘調査による結果と図面の記載がある。
15) 2020, 『名勝松花堂及び書院庭園保存活用計画書』, 八幡市教育委員会発行: 泉坊と松花堂の現状の詳細な記述がある。

2. 松花堂の立地と室内

2-1. 松花堂の建物の位置、および露地、縁側、近隣建物との関係

松花堂は4度の移築を経験しているが、1637年に創建されてから明治の廃仏毀釈で破却されるまで、石清水八幡宮の東斜面の泉坊敷地内に位置していたことはわかっている。尚、筆者らの調査により、大谷直が石清水八幡宮の山裾に居住し、建物を見ていたであろうことも京都府立京都学歴彩館所蔵の記録資料からわかっている。しかし創建当時の松花堂の正確な位置は未だ定かではない。そこで、表1中1.2.7を精査することで創建当時の松花堂の位置や周辺状況の姿を分析し、また3.4.5.6.8-15の資料の識者による見解も参考にした。

その中で、過去に触れていない新しい発見があり、創建当時の立地の姿を分析することができた。発見とは、江戸時代後期に作成されたとされる『名物数寄屋図』⁴中の『都林泉名勝圖會』⁵に描かれている「松花堂全図」右上にある説明文である。原文と現代語訳を以下に示す。(表1中5.9参照)

松花堂東面図朝井家名所図会所載 此図松花堂正面なれば 四棟式ツ折の唐戸なるを 画工南面と混して杜撰の図を画きたり 然れども庭の図に誤なけれハ参考としてここに粘す
甲辰七月 中ね■人 (■は判読不能)

松花堂の東側の図面。朝井家の名所図会に載せられている。この図は(実際には)松花堂の正面なので、四棟、ふたつおりの^{からど}唐戸の筈なのに、画工(絵かき職人)が南側と混同していかげんな図を描いたのである。しかしながら庭の図は間違っていないので参考ここにあげておく。

甲辰七月 中ね■人 (■は判読不能)

秋里離嶋は『都林泉名勝圖會』, 1799, 504頁の左上に「松花堂全図」として説明を掲載しているが、上記の内容には触れていない。ただし、『名物数寄屋図』と『都林泉名勝圖會』に描かれた図は同じ図であることから両者共版画による図と判断できる。この『名物数寄屋図』の説明文(図1参照)が真実であるとする、『都林泉名勝圖會』の松花堂の建物図は東側を描いており、庭は南側を描いていることになる。これは、図3に示す現在見る遺構の位置(『史蹟松花堂およびその跡整備事



図1 『名物数寄屋図』の中の松花堂の図と説明文

業報告書』を引用し作成)と異なっている。遺構現場を計測すると縁側から斜面際まで30cmほどしかないが、斜面が崩れた形跡があり、古くはもう1m程盛り土があったようである。それでも都林泉名勝圖會に示すような飛び石のある広い露地は存在できないので、うまく機能したかは非常に疑わしい。縁側の機能性から考えると、創建当時の松花堂の位置は現遺構よりも幾らか斜面より内側にあり、ここに示されているようなある程度の広さの庭があったと考えるのがよいと思われる。『男山考古録』を参照しても、創建当時の松花堂は現在の遺構より北西に位置していたと記述されている⁶。

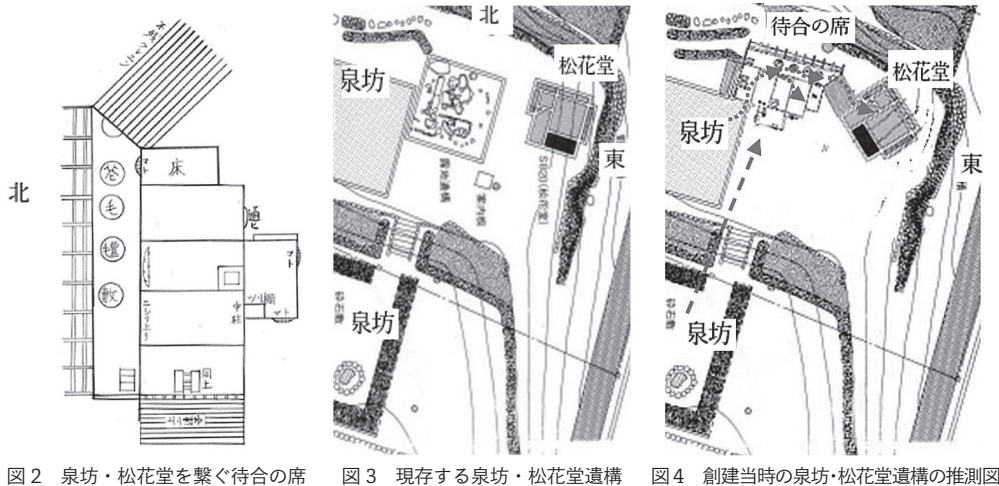


図2 泉坊・松花堂を繋ぐ待合の席 図3 現存する泉坊・松花堂遺構 図4 創建当時の泉坊・松花堂遺構の推測図

もう一点、これに関係する新しい発見があった。それは、西村芳次郎の説として佐藤虎雄が『松花堂昭乗』, 86頁⁷に以下のように言及していることである。尚、図2に同書87頁に添えられた平面図を示す。

閑雲軒は泉坊東北の崖上に設け松花堂に至る廊下傳ひの待合の席である。小堀遠州の好みで長く三畳外一畳半で降雨の際には此の席を経て通った。北の窓より見る時は閑雲眼下に見下すとて名稱したのであるといふ。『八瀧珍藏録』に「宗甫数寄屋図」と題して待合四畳敷に花毛氈敷をつけた図があり、「眼下_淀川西北山上見晴絶景云計」と説明してあり,,

定説では閑雲軒(表1中7の301頁参照)は瀧本坊にあったとされているが、泉坊跡地は上記の図3, 4の中の左下に黒く縁取った箇所も含まれていることから、西村のいう閑雲軒が松花堂に付随していたのであれば、「北の窓より見る時は閑雲眼下に見下すとて名稱したのであるといふ。」が成立し得る(図中、破線の矢印参照)。佐藤虎雄は同著にその待合の席の

平面図を載せている。松花堂をやや北西に移動し少し回転させて縁側前の庭を広く取った上、この待合と組み合わせてみたのが図4である。動線的に泉坊の北東角から松花堂に繋ぐことが可能である（図中、点線の矢印参照）。「眼下淀川西北山上見晴絶景云計」の説明によると瀧本坊にある「閑雲軒」からは決して見えない景色である。よって松花堂創建当時には、瀧本坊の閑雲軒の他に、泉坊の松花堂にもよく似た待合としての建物が付随していたのではないかと推測できる。

2-2. 松花堂と遠景との関係

下記の地図（図5）は江戸時代後期における各建物の位置を示す東谷・中谷地区地形測量・地区割図⁸である。この地域は東谷の本体ともいう深く大きな谷地形である。松花堂創建当時、松花堂の東縁側からは宇治の朝日山辺りが見えたであろうことが想像できる（図中、破線の矢印参照）。つまり創建当時の建物は、東眼下にある風景を開口部から見える意匠の一部に取り入れ、同時に宇治川・朝日山・黄檗・城山等を借景（図6参照）としている⁹。



図5 東谷・中谷地区地形測量・地区割図



図6 都林泉名勝圖會に掲載された泉坊・松花堂・庭を描いた図

2-3. 松花堂の室内（入口、土間、板の間、二畳の間、躰口）

松花堂は多くの危機を乗り越え現在まで保存されてきた。現存する松花堂の室内の間取り（図7）は文久時代の松花堂の平面図（図8）とほぼ同じであり、創建当時から文久時代までに室内が変更されたという記録は残っていない。現状の室内を分析することによって概ね創建当時の姿を表現することができると思われる。ただし、林野全孝の調査報告（表1中13参照）によると、仏間裏の空間と建材は変更されているようである。竈と天井画については後述する。

『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十三冊』の資料の中に「土間の竈のあたりを中心として、各室の連続甚だ要領よし。」との記述がある。これは竈が茶事における懐石のほか、日常の煮炊きを大切にした食生活に貢献するよう空間がデザインされていることを示唆して

いる。躰口がある板の間と土間の間は開放できる仕組みで、竈の火の世話は土間側から、給仕は板の間から直接できる便利なハッチ形式といえる。二畳の間からも障子を開ければ土間に降りずとも竈の端に直接手が届く。板の間の斜め左奥には隅切り一畳程の水屋や台所として使える空間を置き、開口部の扱い次第で一体的に使うことも仕切れることもできるようにしている。また、躰口は通常より大きく、また板の間にあることから、物の搬入や通用口としても柔軟に使い、日常生活と客へのもてなしの機能を切り替えるのが便利になっていると考えられる。小入口と呼ぶほうが適当かもしれない。

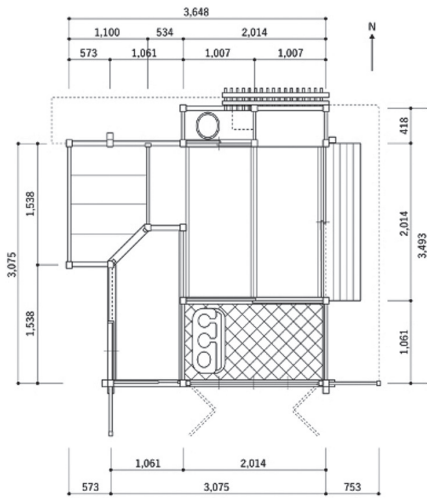


図7 現在の松花堂の平面図

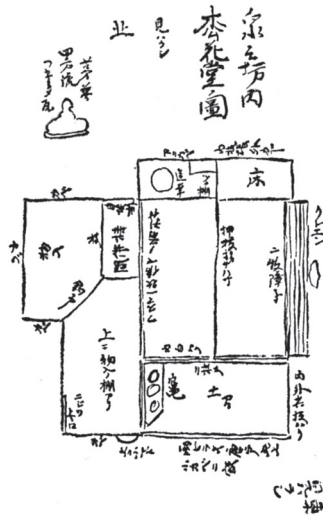


図8 文久時代に描かれた松花堂の平面図

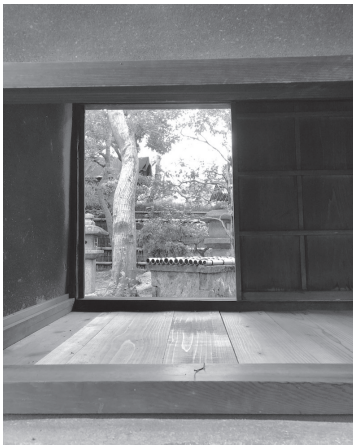


図9 松花堂の板の間から躰口を見る

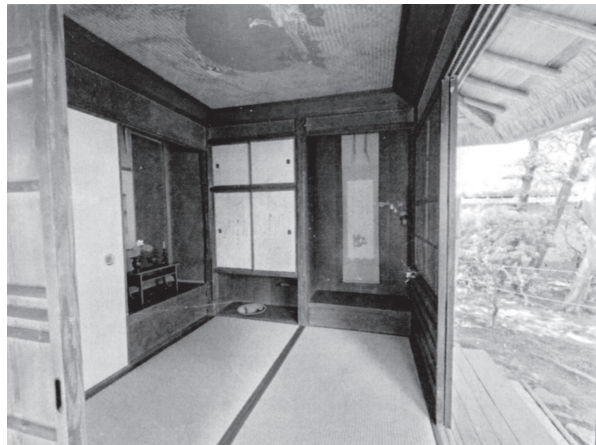


図10 松花堂の土間から二畳間・床・仏間・縁側・庭を見る

土間空間は、板戸を閉めれば竈の余熱や空気層となることによって外からの寒さを防ぐ働きをしている。また、夏季は二畳の間の縁側から土間入口、竈奥の開口部、そして躰口に抜

ける風通しが考慮されている。さらにこの通風は引き戸や上げ下げ戸によって微調整できるため、季節に応じて快適な外気との関係を維持できる巧妙な室内デザインであると考えられる（図9, 10参照）。さらに、床の左には三段に分けられた機能的な袋棚があるが、その最下段に設けられた丸炉は点茶だけのために使われたのであろうか。上記のような室内気候の工夫から考えると、冬の暖をとる手段の一つとしても利用したのではないだろうか¹⁰。また、二畳の間には奥行きを絞った仏間を設け、また天井には鳳凰の画を配することによって、信仰や芸術を尊ぶ心を助長する意匠を追求したと考えられる。まとめると、茶室と住居が調和した柔軟性があり、その柔軟性は、合理的な生活動線、多様な開口部、便利な調理と収納、室内気候の調整、周囲の景との繋がりという点で実現されているといえる。

創建当時の室内の姿を描き出す手がかりとしてもう一点指摘しておきたいところは昭乗の生い立ちと人間関係である。

中沼家沼家譜によると昭乗は一生涯父母の名や出生の地を語ることはなかった。昭乗の兄は喜多川興作（1579-1655）と呼び、幼少の頃、近衛信尹（1565-1614）に仕えた。興作は聡明な子供で、近衛信尹によって1591年3月に奈良興福寺の別當である一乗院門跡の諸大夫の家柄の中沼家に迎えられ、後に左京とした。昭乗は幼少期を奈良で兄と共に暮らしている。昭乗も近衛信尹に仕え、また、近衛前久（1536-1612）からは書を学んでいる。昭乗の兄である左京と昭乗は幼少期から公家の文化に親しんで学べる環境で生活をしていた。恵まれた環境で幼少期を過ごした昭乗の文化的な基礎はこの頃に大きく育まれたと考えられる。昭乗は真言密教の阿闍梨であり、絵画・書道・茶道に堪能で特に寛永の能書家三筆のひとりとして高名である。昭乗がまだ10代半ばの頃に関ヶ原の合戦が終わって徳川家康（1542-1616）の幕府政治が始まり、政治や経済が安定し文化的な環境が整ってくる。このような社会的背景は、彼と様々な芸術家との交流を一層助長したと考えられる。昭乗の幼い頃からの成長環境が、自ずと宗教観や求道的な精神を伴った総合芸術的才能を発揮する方向に向かわせたといっていよいであろう。また、そこに空間デザインという要素が加わった要因としては茶室や作庭を手がけた小堀遠州との交流が関係していると考えられる。遠州の妻は昭乗の兄、中沼左京の妻の姉にあたり、まず縁故関係がある。書道においては遠州が昭乗を師と仰ぎ、茶道では昭乗が遠州を師とした。昭乗と遠州の合作の「百人一首帖」¹¹が残っている。このような二人の親密な交流関係があることを考慮すると、昭乗が松花堂を創建した時にも遠州がその創案に関わった可能性があっても不思議ではないであろう。『石清水八幡宮史料叢書一 男山考古録 全』「閑雲軒」には、庵の建立に関して「寛永年間中、松花堂昭乗と小堀政一（遠州）相語らひて好み営れし室也、」¹²とあり、昭乗と遠州二人が瀧本坊の閑雲軒に集う情景が語られている。もとより親密な関係であった二人の共創があったことがわかる。昭乗が育ん

だ、僧侶、芸術家、文化人としての融合した世界観と美意識が洗練された造形として具現化されているといえる。

2-4. 松花堂の竈

松花堂の土間左側には竈が据えられている。この竈の意匠は松花堂に入った時の第一印象に大きな影響を与えている。材料は土に藁を混ぜて水で練り固めたもので、2火口、1釜置、火口の向きは東である。火口と釜置が等間隔で配置され、複数の煮炊きを機能的に行えるように設計されている。実測すると、幅840mm、奥行き582mm、高さ455mmであり、幅に対して奥行きの比率が $1:\sqrt{2}$ に近いバランスのとれた形になっている。

松花堂に現存する竈に関する古図で最も詳しく描かれているのが、堀口捨己によって「おこし絵図の附図」として残されている文久時代のもとのされる松花堂の竈の平面図(図11)である。幅が約900mm、奥行き約480mmであり、現状とは異なっている。時代を遡ると、

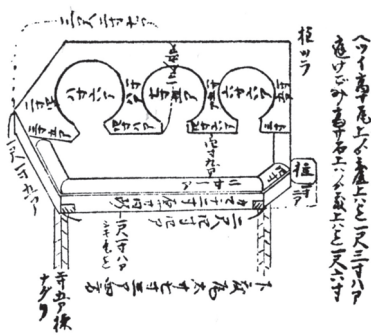


図11 文久時代の松花堂の竈の平面図



図12 中家の持ち出し竈

「都林泉名勝圖會卷五 一乾」に「三竈物置棚あり」¹³との記述もあることから文久の頃は3火口であったと思われるが、現在は2火口、1釜置の機能を分化した形に変更されている。平面形状を見ると、現存では丸みを帯びているが、文久の頃では

角張った形になっている。また、現存の竈の正面と側面には瓦がはめ込まれているが、古図にはそれらが見当たらない。この図には詳しく説明書きや寸法が入っているから、竈の制作や修復をするために描かれたものと考えられる。珍しいのは、図中にナグリ加工した足台が書き入れてあることであり、台の上に木枠つき竈を載せているようである。これらから窺える竈の意匠は、「持ち出し竈」の様相を呈している。水害の多い地域では、必需品である竈は運び出しやすい形状にするために木枠つきの板床上に置けるようにし、その構造体を土間にそのまま置くことができるようにしていた。図12は、奈良県生駒郡安堵町窪田の中家に古くから残る持ち出し竈である。実例として示しておく。松花堂があった場所は雨が降ると土石流が発生するような地形のため、一時期このような形に変更したと推定できる。

次に特徴的なことは、現在の竈の側面に丸瓦が5枚装飾的に嵌め込まれていることである。松花堂の竈(図13)に施された5枚の丸瓦は滑らかな弧を描くように配置されている。残念ながらどの古図を見てもこれらの丸瓦が古くから嵌め込まれていたことは確認できない。こ

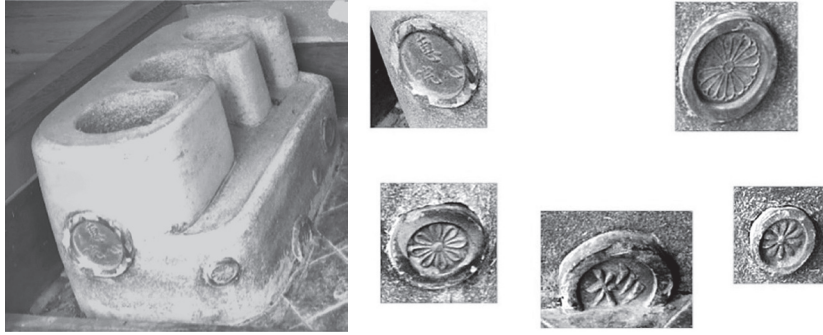


図 13 松花堂玄關土間の竈と嵌め込まれている丸瓦（恵心院・杉・菊紋，3種類）

ここで2つの可能性が考えられる。創建時に昭乗によって発案されたか、後に付加されたかである。一般的には後者と考えられているようである。しかし今回の現地調査から、筆者らは前者も否定できないと考えており、その理由を以下に示しておく。

まず、「恵心院」と描かれた丸瓦があることである。これは「真言宗智山派・朝日山・恵心院」の物にほぼ間違いないと判明した¹⁴。「菊紋」の3種類の丸瓦は瀧本坊跡の近くに散乱していた丸瓦と推測される。「杉」と描かれた丸瓦は「石清水八幡宮の塔頭であった杉本坊」の丸瓦と推測される。そして特に恵心院に関しては、以下のことが判明した。恵心院は密教の阿闍梨であった昭乗と同じ派の密教寺院である。中沼家譜には昭乗の姉妹が「星野某ノ妻」とあり、昭乗の茶の調達先が宇治であることから、星野とは当時宇治の茶師であった星野家の可能性が高い。尚、恵心院は茶の歴史の中で「火除の祈禱」をするという重要な行事を担っており、茶の行事を通して昭乗と星野家、恵心院住職の関係が推測できる。昭乗が恵心院の丸瓦を松花堂の意匠に使っても不思議ではない。

第2は、自由な構造や意匠を凝らして独自性を創造していった茶室の在り方が、「竈土構」の様式に瓦片を入れるという試みを生んでいることである。

寛永年間に創建されたとされる夕佳亭は公家の勸修寺家出身・鹿苑寺金閣住持であった鳳林承章（1593-1668）が関わったとされている。鳳林承章の日記『隔冥記』には夕佳亭において客人をもてなした様子が記されている。「寛永14年7月10日 於茶屋酌酉水，点鳳団。午刻於茶屋，需公・闇公酌酉水，大酔也」¹⁵（茶屋とは夕佳亭のことである）とあることから、松花堂創建前の1637年7月10日までに夕佳亭は存在していたことになる。また鳳林承章と昭乗の関係については、1638年1月12日に夕佳亭の住職、鳳林承章宛の昭乗の手紙があり、昭乗との交流があったことがわかる。内容は鳳林承章が昭乗に絵の注文の依頼をしたことについて書かれていた¹⁶。この二人の親密な人間関係を鑑みると、昭乗が夕佳亭の瓦が入った竈を見ていたと考えられる。それに刺激を受け、参考にした可能性がある。

第3は竈の修復に関して、佐藤ひろゆき氏，宮奥淳司氏，壁勝の田中健一氏（文化財を扱

う左官業の人達)に聞き取り調査を行った結果である。まず佐藤氏によると、「江戸時代は存在することが当たり前のことに関しては資料として書き残す習慣はなく、竈に関しても同様で、文久時代頃とされる松花堂の土間の竈の平面図は俯瞰図を伴う製図であり、側面は見本になる竈があれば製作可能であることから、側面図を書いていないのは実物の竈がそこにあったからであろうと推測される。」、宮奥氏によると、「移築をするということは、出来るだけ元の姿に戻そうとして移築する。その中で竈だけ違う意匠にしようという考え方はあり得ないことであることから、竈も元の姿にしようと心掛けるものである。また、左官の仕事は殆ど代々口伝えしながら継承していくので書き記したものは存在しない。」、また、松花堂と泉坊書院の修復に携わった田中氏によると、「15年ほど前に松花堂の竈の劣化した部分を塗り重ね修復した。現在の技術であれば竈を移動させることは可能ではあるが、そのようなことをした事例はない。明治時代に竈の移動を可能にする技術はないことから竈は移築後に造り直した。竈に嵌め込まれている丸瓦は取り出せることから入れ直すことは可能である。」とのことであった。

これらの言から、創建当時の立面的意匠が図面等を介さずに職人の手から手へとそのまま受け継がれてきた可能性を否定することはできないのではないかと考えられる。

2-5. 松花堂の天井画

『男山考古録』の「松花堂」の項に次に示す天井画の記載がある。「殊に見るべき物は天井也、竹の組物、地は黒色にて白く梧桐に鳳凰、外小鳥水鳥累梧數禽群れをなす、簞の類か」。この文面は下記写真(図14)の詳細観察から松花堂に創建当時から天井画が存在していたことを分析できる高い可能性を示している。



図14 創建当時と推測される天井画



図15 竹網代張の天井画 土佐光武作

図 14 は松花堂創建当時の天井画とされており、鳳凰の右上に雲月、足元と左上に小鳥を配している。現在、所在は不明である。また、図 15 は土佐光武（1844-1916）の筆による八幡松花堂に現存する天井画である。中央に日輪を描き桐と 2 羽の鳳凰を配している。

この天井画は松花堂の 2 畳の間の意匠を強く印象ける存在であるが、これに関する 5 人の専門家（西村芳次郎・佐藤虎雄・林野全孝・堀口捨巳・中村昌生）の論考は以下のように異なっている。

西村芳次郎：「天上は舊狩野永徳（1543-1590）の筆なりしに屋根もり甚々敷爲め破損採用を不得、」¹⁷

佐藤虎雄：「従来樋口家（大阪松花堂）にあった時より八幡松花堂の遺構であると傳來して来たものであるといふ。（昭和十一年一月十九日調査）」¹⁸

林野全孝：「大阪松花堂の天井画は松花堂初期の実物であるが（中略）後誤って本松花堂と混同されてきたものであろう。」¹⁹

堀口捨巳：「大阪松花堂が古い松花堂の特徴を伝える所多くその中心の床廻り天井等よく残っている。故にこれこそ遺構として、今は考えたいのである。」²⁰

中村昌生：「貴志家（大阪松花堂）時代には鳳凰を中心に雲月に多くの小鳥を配した立派な天井画があったのである。」²¹

佐藤虎雄と林野全孝の見解では、大阪松花堂²²にあった天井画は初期八幡松花堂の遺構であることを強く意識しているが、堀口はそれを示唆しているところで止まっている。西村芳次郎と中村昌生は当時の事実を述べているだけである。また、西村だけが作者について触れている。いずれにしても、着彩された鳳凰の天井画が二畳の間の意匠として古くから存在し、それが昭乗によって意図された可能性があることを示していると考えられる。

3. 総括と結論

本論では松花堂の創建当時の姿を描き出すことを目的に、様々な資料や情報を組み合わせながら考察を進めた。

まず創建当時の松花堂の立地については、松花堂の遺構は石清水八幡宮山上の東斜面に現存することから何度も現地を確かめた上、『名物数寄屋図』中の『都林泉名勝圖會』に描かれている「松花堂全図」の前庭に関する説明文、佐藤虎雄の『松花堂昭乗』に言及された「待合の席」の存在、『男山考古録』「松花堂」の項にある「同泉坊境内、坊の良位ニ今在、舊は北方にて少しく西へ寄て在しか、近頃今の所に転移たりと云う」を関連づけることによって、

現遺構よりも斜面内側にあり、少し右回転すれば北側の泉坊と待合の席を通してつながっていた可能性があることを示すことができた。

建物の背景と眺望については、現在は草木が繁りすぎているため、投稿線図から読み取る他、『都林泉名勝圖會』中の「松花堂 瀧本坊、隣地、泉之坊があり昭乗翁 退院の自坊に松花堂 茶室の号之数寄屋 四帖半 水屋壺帖半 勝手二帖、三竈物置棚あり、古体の唐戸兩開き、天井は隣にて編む、屋根茅葺、額八分。」、また、「数寄屋待合ホ風流尔して庭中より宇治川 朝日山 小倉池 伏見澤田 黄檗 木幡里 城山 鮮やかに見えて無双の妙景なり」から、東側に山河を縁側から大きく望むことができる環境であったことがわかる²³。

間取りや室内の造作に関しては、現状と古図が概ね一致していること、また大きな変更を行ったという記録が残っていない点から、ほぼ現状から見て取れる姿であったと考えられる。また、現地調査による分析から、機能と美の融合が図られていることを明らかにした。ただし、北西角の部分、竈、天井画、使用木材については、移築の際に変更や修復が行われている²⁴。

松花堂を特徴づける竈については古図に一貫して記載されているため、創建当時から存在したと考えられる。しかし移築の際に作り替えられるため、現状の姿は創建当時とは違う。火口の数や竈の様式にも現状と古図では異なっている部分があった。ただし、筆者らは竈の側面に施された丸瓦が創建当時に意図されたものであると考えている。この点については、松花堂がどのような経緯を経て山上から山下に移築されたのかを知ることができる「行政文書」²⁵を確認できたことが役立った。最終移築者である井上伊三郎と最初に松花堂の建物を移築した大谷直の情報の中に、八幡町戸長であった井上伊三郎が山上に住まいしていた大谷直の建物調査をしたことが記されている。筆者らは、この調査の中で井上伊三郎が1800年頃に移築された松花堂も調査し、瓦を嵌めこんだ竈を確認し、そのまま残したと考える。

天井画に関しては、『男山考古録』、307頁に「殊に見るへき物は天井也、竹の組物、地は黒色にて白く梧桐に鳳凰、外小鳥水鳥累梧數禽群れをなす、簞の類か」とあることから、鳳凰のモチーフは共通しているいが、現在のものとは異なる夜を意識した表現の姿であったことは明らかである。

謝辞

尚、本稿を執筆するのにあたり、ご協力いただいた八幡市松花堂庭園・美術館の平井俊行館長、川畑薫学芸員、社寺の広報担当者の方々、そして佐藤ひろゆき氏、宮奥淳司氏、田中健一氏、浅田晶久氏に心より感謝したい。

註

- 1 藤原尚次, 「泉坊」, 『石清水八幡宮史料叢書一 男山考古録 全』, 石清水八幡宮社務所, 1960, 307 頁を参照。
- 2 『はちコレ』, 八幡市立松花堂庭園・美術館, 2014, 5 頁を参照。
- 3 『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告 第十三冊』, 京都府, 1932, 72-75 頁。
- 4 江戸時代後期, 『名物数寄屋図』, 中に『都林泉名勝圖會』の図である「八幡泉坊昭乗翁故居」と松花堂の平面図等の記載がある。
- 5 野間光辰(編)「都林泉名勝圖會 卷五」, 『新修 京都叢書 第九卷』臨川書店, 1967, 504 頁参照。
- 6 前掲載註 1, 307 頁, 「松花堂」を参照。松花堂は「同泉坊境内, 坊の良位に今在, 舊は北方にて少しく西へ寄て在りしか,」とある。
- 7 佐藤虎雄, 『松花堂昭乗』, 河原書店, 1938, 86 頁。
- 8 『石清水八幡宮境内調査報告書』, 八幡市教育委員会, 2011, 35 頁参照。
- 9 前掲載註 5, 500. 501 頁参照。
- 10 曼殊院の丸炉との類似性がある。曼殊院執事長の談(2020 年 10 月)によると, 「この部屋は住職の寝室の隣の部屋に当ることからも丸炉の使用目的は茶事というよりは日常的なものと判断できる。加えて寝室には角炉が切っており, その炉も丸炉も茶事にのみ使用するのではなく暖をとるためのものでもある。」とのことである。
- 11 小堀遠州・松花堂昭乗両筆, 「百人一首帖」, 『松花堂茶会記と茶の湯の世界』, 八幡市立松花堂・庭園美術館, 2002, 26 頁参照。
- 12 前掲載註 1, 「閑雲軒」, 301 頁。
- 13 前掲載註 5, 499 頁参照。
- 14 「恵心院」丸瓦, 朝日山恵心院住職 福若亮阿氏と浅田製瓦工業 浅田晶久氏, 2021 年の聴取による。
- 15 鳳林承章, 『隔裳記』, 鹿苑寺, 1958, 69 頁。需公・闇公が茶屋で酒と茶を飲む様子が書かれている。
- 16 前掲載註 15, 105 頁参照。「四日, 男山之瀧本坊式部卿筆之三幅壺対絵三枚, 北条久太所望, 而来也。即渡于江馬紹以方也。」とある。
- 17 西村芳次郎, 『八幡松花堂栞』, 西村閑夢, 1929, 19 頁。
- 18 佐藤虎雄, 『松花堂昭乗』, 河原書店, 1938, 126 頁。
- 19 林野全孝, 『大阪市桜宮松花堂調査報告』, 大阪市教育委員会事務局, 2002, 14 頁。
- 20 堀口捨巳, 「松花堂の茶室」, 『茶室おこし絵図集 第四集』, 墨水書房, 1964, 67 頁。
- 21 中村昌生, 「松花堂の保存」, 『日本美術工芸 413』, 1973, 77 頁。
- 22 前掲載註 19, 14 頁。
- 23 前掲載註 5, 499 頁参照。
- 24 前掲載註 19, 6 頁。
- 25 『京都府庁文書 明 7-23-1』, 京都府立京都学歴彩館所蔵, 文書の随所に大谷直(明治 4 年 6 月 15 日分家, 中山治磨から大谷直と改名。戸籍謄本が残っている。)の記録が散在する。大谷直と最終移築者の井上伊三郎の関係が理解できる資料が多い。石清水八幡宮の坊が廃仏毀釈により取り壊された経緯や坊に住まいしていた人達のその後に関わる資料が残されている。

図版リスト

- 図1 『名物数寄屋図』の中に描かれた『都林泉名勝圖會 卷五』の松花堂の図と図の中に書かれた説明文を掲載した。
- 図2 前掲載註7引用, 図3の「待合の席」の図である。創建当時の松花堂の位置を検討したものである。
- 図3 『史蹟松花堂およびその跡整備事業報告書』, 石清水八幡宮, 1986, 図-1, 環境整備全体計画図引用。
- 図4 前掲載図3引用, 図2の「待合の席」の図を入れて創建当時の松花堂の位置を検討したものである。
- 図5 『石清水八幡宮境内調査報告書』, 八幡市教育委員会, 2011, 35頁参照。
- 図6 前掲載註5, 500, 501頁。
- 図7 「1 松花堂 平面図」, 『史蹟松花堂およびその跡 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業報告書』, 八幡市教育委員会, 2015年, 写真図版, 頁数なし。
- 図8 前掲載註20, 52頁参照。文久時代頃の「松花堂」の平面図と説明文が記載されている。
- 図9 2021, 筆者撮影。松花堂の土間から躰口を撮影。
- 図10 「松花堂について」, 八幡市松花堂庭園・美術館 館長 平井俊行, 2021.11.23付作成資料より転載。
- 図11 前掲載註20, 61頁参照。文久時代頃の「松花堂の土間の竈」の平面図と説明文が記載されている。
- 図12 2021, 筆者撮影。奈良県窪田の中家の竈(持ち出し竈)。
- 図13 2020, 筆者撮影。松花堂玄関土間の竈と嵌め込まれている丸瓦(恵心院・杉・菊紋, 3種類)。
- 図14 前掲載註19, 写真17 桜宮松花堂を参照。
- 図15 2022, 筆者撮影。竹網代張の天井 土佐光武(1844-1916)作。

The design of Shokado hermitage:
An analysis of its present interior and a study of the original state

SATOU, Etsuko

NOGUCHI, Kiyoshi

Shokado hermitage (Shokado hereafter), which was designed and built in 1637 by Shokado Shoji (1584–1639), one of the distinguished artists in the Edo period, has a unique function combined with flexible flow lines both as Hojo (chief priest's living space) and Chashitsu (tea ceremony room), and it was controlled by the creative planning and introduction of spatial elements.

Shokado has been moved from the original location and reconstructed several times while its components fortunately escaped destruction due to Haibutsu kishaku (anti-Buddhist movement at the beginning of the Meiji era), and now stands in the garden of Shokado Museum. Research shows its photos in the 19th century but no reliable material has been found to prove its original condition.

This paper aims to depict the original state of Shokado basing on its previous studies and our own documentary search and fieldwork. The actual subjects are; Shokado's location, accompanying gardens, entrances, earthen-floor room, wooden-floor rooms, narrow verandah, *kamado* kitchen stove and decorative ceiling which we were able to conduct on-site investigation.

At present the workable method to achieve this aim is to combine previous and new pieces of information in a creative and skillful way.